

一万年の風の記憶を反復する人

未津きみ第五詩集

『ブラキストン線——十四歳の夏』に寄せて

縄文 甕 —— 土器 ——

化していったという。その第一詩集の中に「縄文 甕 —— 土器 ——」という詩がある。

1

青森の未津きみさんから第四詩集『幻の川 幻の樹』が二〇〇七年に送られてきた。その数十篇を初めて読んだ時に、不思議な感覚にとらわれた。詩の言葉がざわざわとゆらぎ、遠く古代からの風が響いてくるような感じがした。古代の知識を引用しているのではなく、弥生時代を遙かにさかのぼり、縄文時代の山河や海辺に吹き渡っていた風が、未津さんの肉体を通して詩行のリズムに乗り移っている思いがした。未津さんはきつと一万年以上の東北の歴史を我がものとする困難な詩作を自らに課しているのだろうと考えられた。

未津きみさんの初めての詩集『仲間とゆく』は三人の共同詩集で一九六〇年に発行されたそうだが、本格的な第一詩集は『浪漫散步地図』で一九八八年に刊行された。その当時、未津さんは会社を早期退職したが、その結果として詩作に専念していったらしい。二十代の後半で東奥小説賞を受賞し、文芸誌「新潮」や「文芸」に小説も発表していたくらい詩作よりも小説に熱中していた。けれども小説よりも詩の方が自己表現に適していることに気づき、真になすべきことを自覚

土を捏ねる手指の勁さで
獣を獲え
土を宥める優しさで
森を渡る風に季の移ろいを測り
土を揉む腕力に
集落の廂に神の宿りを祀る
誦える祭文は
川の筋に沿い
森の樹々を響かせ
峯々を木霊し
山稜を崩れ墜ちては

甕にこもる（前半部）

青森で三内丸山遺跡の本格的な調査がされたのは一九九二年頃で、江戸時代からこの地に遺跡があることは分かっていたらしいが、この詩集が出た頃はあれほどの集落が存在していたことは知ることはなかった。未津さんの暮らす青森市郊外近くの高台に三内丸山遺跡があり、未津さんはきつとその一万年もの縄文人の暮らしの存在をいつも身体の内側に感じていたに違いない。陸奥湾は本州の地の果てであり、そこにある津軽平野は山と河と海が渾然一体となった場所であり、北海道、サハリン、シベリア、ユーラシア大陸に広がる出発点ともいえる場所であるだろう。日本でありながら実は世界に繋がっていく中継地点だったはずだ。その意味で未津さんの感性は時間的にも空間的にも広がっていったように思われる。

未津さんの風は、「火の匂い」を放って「遠古の夢をかき鳴らし」到来してくるようだ。それは土器を製造する縄文人の「土を揉む握力」や「集落の廂」に神を感じるようなのだと告げている。そして「風」とは神を「誦える祭文」を響かせ、川や森や峯々などの山河に吹き渡り、ついには「甕にこもる」と書き記している。

荒々しく分け入る力を

拒めない力が折れて
身こもる女のように甕はふくらみ

かき鳴らす絲線の弦は
煙蒸された呪文の痕
集落の廂に睡る神々の
煮えたぎり
津波のように荒れ狂い
古代の生きざまがとぐるを巻き
あふれんばかり
仰向けになり
唇をよせて吸うがいい
喉仏を鳴らし
攪拌まわすがいい
穢れた手で
古の夢を覚ますがいい
禁忌に触れたものたちへの
罪のむくいよ
生きたまま
喉頸をかみきられ
手指をそがれては火焰に吞まれ

襖底に埋められるのは
儀の凶柄が
新たなる仮説を塗り変え
命の綾に架けた橋桁を往來する^{ゆきまき}ため

遠くの過去を呼びもどし
未来の彼方を引きもどし
途上に佇ちつづける

無窮の旅人よ
(後半部)

未津さんは縄文の甕を母胎のように受け止めている。その甕の中には古代の神々が息つき、民衆たちの日々の暮らしの細部が甦つてくる。「古の夢を覚ますがいい」ということは、古代の禁忌を暴き、その「古代の生きざま」が現代においても実は私たちの意識の中に息づいていることを知らせている。私たちは何者かという問いを発する時に、未津さんの試みは、とても刺激的だ。小さな自己にこだわる現代人へのメッセーヂになっていると思われる。あたかも山河から湧き起る「風の言葉」が未津さんの肉体を通過してうねりだし、「遠くの過去」と「未来の彼方」に架橋し、その途上を「無窮の旅人」として生きようと試みている。このようなスケールの大きい問いを発していた詩人を思いうかべるなら、真つ先に宗左近

を想起してしまった。宗左近は東京大空襲で逃げる時に母の手を離してしまい、目の前で母を焼死させてしまったことを生涯こだわりながら、戦争を最も憎み、戦後詩の金字塔である長詩『炎える母』を書き上げた詩人だ。戦後になってこのような武器を作り出し他国を攻め滅ぼす侵略思想を弥生人の特性であることを見出し、その弥生人に侵略され、同化されていた縄文人の中に日本人の根源的なルーツを探っていた。宗左近は縄文人の自然を畏敬し家族や他者を愛する縄文宗教といえるべきものを過去のものとするのはなく、縄文貝塚の多い千葉の市川で「市川縄文塾」を作り、市民たちと縄文人の精神を学び、それを現代に生かそうとした。私もまたその「市川縄文塾」に通った一人だったが、宗左近がなぜ日本人の深層を追及していこうとしているのか、その思いが今も生々しく喚起されるのだ。そのような宗左近の試みと未津さんの詩作が共通するものがあると私には感じられたのだった。

2

未津さんの第二詩集『智恵子曼陀羅』は第一詩集の翌年の一九八九年に刊行された。この詩集は、高村光太郎の妻で精神を病んだ智恵子に代わって、光太郎の『知恵子抄』への返詩を試みようとしていた。未津さんは彫刻家で詩人の高村光太郎と貼り絵作家の智恵子の二人の関係を二十世紀の縄文人

的な愛の精神であると見ていたのではないか。この詩集の二十六篇はすべて二人の相聞歌でありながら、智恵子が亡くなった後も続く人間の愛の極限の姿を物語っているかのようだ。その中から「鹿笛」を紹介したい。

鹿 笛

病窓のあけくれ
三年八ヶ月
釣瓶落しつづりの刻もすぎる

五ヶ月ぶりに訪れた
十月五日
光太郎を待っていたものは
病み廃てし女
智恵子五十三歳

死因
粟粒性肺結核
添え書きされる
直接理由

遺されたもの

紙絵作品千数百点
流動する愛の原質が
岩漿まagmaの烈しさで語り
かたくなに火成岩の沈黙にねむる

たずさえてきた
一顆のレモンは
貧者の一灯か
黄泉路よみちを照らす
黄灯の杖か
酸涼の雫をしたらせて
待つことの楽しさは
餓鬼道におちいり
三年八ヶ月より長かった
五ヶ月の空白
五十余年の女の生涯に等しく
涙もすがれる季節

秋風をきり裂き
聴えてくる智恵子の鹿笛しかふエが
秋風をまき添えにして哭いている

牡鹿を恋うる

牝鹿の鳴き声に擬せられ

智恵子の肉叢を嗅ぎまわり

鹿笛の震音に猛り狂う

光太郎五十六歳

3

第三詩集『羊水』は十九篇にわたり「母の羊水」を巡って
いく詩集だ。冒頭の詩「体内の旅程は」はこの詩集の試みを
明らかにしている。

胎内の旅程は

胎内の旅程はいま尽きようとして

激しいドラマを展開する

太古の海から

陸へあがった古代生物の

変貌の旅路を

そのままくぐり抜けてきた

遠大な過程

古代の一億年を

数日で復習する胎児の

母の海での日常が

刻を大腿でこえてゆく

細胞の大集団が群れをなして

個体へと集結をかさね

くる日も くる日も

未津さんの詩は、智恵子の最晩年の五ヶ月間に病室を見舞
わなかつた光太郎の非情を一見責めているようにも読み取れ
る。しかし最終連を読むとその謎が少し分かる気がする。光
太郎は最愛の妻が廃人となり壊れていくさまを見るに忍びな
かつたに違いない。未津さんもそのことが分かつているから
こそ、「牝鹿を恋うる／牝鹿の鳴き声に擬せられ／智恵子の
肉叢を嗅ぎまわり／鹿笛の震音に猛り狂う」と光太郎の心情
を記したのだと思う。美しい存在が壊れていくことこそ最も
恐ろしいことであり、そのことを回避するには光太郎自身も
一緒に死ななければならぬだろう。しかし五十六歳の光太
郎は、彫刻家・詩人である表現者としてまだ成すべきことが
あつたに違いない、と未津さんは語っているように私には思
われた。光太郎と智恵子の愛の深さを二人の内面に降り立つ
てこの連作は試みられる。そして人を愛することの凄まじい
生きざまを垣間見ようとしたのであり、二人を縄文人の末裔
である日本人の典型として書き記したのではないかと私には
感じられた。

羊水の集合体に揺れている

振りかえる

遠いまなざしの線上に

脚をけり

肩を打ち

背をさすりながら

相貌を形象する

羊水の時間

宇宙空間の果てから

銀河星雲を渦巻いて

なつかしい響きが子守唄になる

胎内の時間

あふれるばかりの羊水に洗われ

その分量の量が

心をくまどるとき

天候は晴れにも曇りにもなり

精神の絵模様が刻まれる

羊水よ

親しみの音をどろかせ

背筋を洗うがいい
羊水でみがかれるバックボーン
立ちあがる脚のけなげさを
鍛えるがいい

古生代の一億年を

数日で生きる

胎児の叡知が

あわただしく上下する

かぎりない羊水が目盛りを

未津さんは「母の羊水」の中に「古代の一億年」のドラマ
を読み取つていこうとする。その縄文時代の一万年を遙かに
さかのぼり、生きものの神秘に触れながら、私たちはどこか
ら来て、どこへ向かおうとしているかという始原の問いとし
ている。未津さんの根源に迫っていく思考方法は、「母の羊水」
に安住することなく、子を生み出した宇宙の誕生の神秘に迫
っていく。異質な父の存在を他の詩では触れているが、多く
は母の存在をさかのぼることによって、命の根源に目覚めて
いったのだろう。冒頭から二番目の詩「その声に触発されて」
の最終連は次のように終っている。「母への訣別を／言語が生
まれる以前の言語でかたりつくす／縁切り状／果たし状／全
身を円形に抱きかかえて／生誕の深淵を覗きこんでいる」。こ

のように母の母胎への問いを発しながら、母や父や家族を大いなる生命体へと解体させていったように私には感じられる。未津さんは「一億年の命の時間」を見詰めて、生きている存在を感じることに奇跡を伝えているように思える。

4

二〇〇七年に刊行された『幻の川 幻の樹』は四十篇を超す厚い詩集だった。I章の十四篇はその土地に生き続ける多様な樹木を通して、家族や親族たちを鎮魂し、また千年もの樹木の声を聴き取るうとしている。そこには仲の良い恋人や夫婦のような二本の樹木の囁きや、孤高の気高い男の独白や、少女に寄せるほのかな恋情など樹木語を豊かに解読している。II章は、陶芸家や写真家たちの作品に寄せた詩群であったり、光太郎の高村山荘を訪れた連作などだった。そして私が最も驚かされたのはIII章の「州」というタイトルの五篇の連作からなる詩だった。

州^{デルタ}

川合にて

出会えば

合流するしかない

互いの始原^{はじまり}を秘めて

二つの川が合流する地点を川合とよびよく社が祀られている

小動物が人々とともに群雄割拠する特別であって特別でない

いわば祝祭の賑わいにみちて

「あう」とは「交合」と古代日本語は説く

二筋の川の出合いを

アイヌ語で「オウコツナイ」という

交尾している川の意である

そればかりか

「川の源」「川の胸」「川の腸」と名付け

川は大つぴらに生殖行為にいそがしい

川は生きている

擦れちがうのでなく

二者がぶつかりあい

水と水の壁が破壊し

よりあわされ

背と背を 胸と胸と

掌と掌を合わせ

果ては海へ吞まれてゆく

静謐にして

はげしい息づかいが起ちあがる

川合では

抱きあい

むつみあい

水は全裸で

素朴にまじりあうしかない

(前半部)

未津さんにとってこの「州」は、最も書きたかったものであり、自らの生きている場所の意味を開示することが、直ちに詩になっていったという記念すべき詩であっただろう。青森の街の古層には、アイヌ人や縄文人たちが一万年前から暮らしていたのであり、その「オウコツナイ」の地名に隠されていた意味は、「州」の恵みを受けた者として説得力があったのだらう。人びとは川の合流する場所に集い街を作っていく。なぜなら大地の「生殖行為」であり、人びとはその富を受けて辛うじて生き延びてきたからだ。二筋の異質な水の流れが合流する場所こそが、新たな価値を生み出してきたことを明らかにしている。その息づかいであるエネルギーを未津さんは詩に変換しようとしていたのではないか。未津さんの詩

作する視線は、二つのエネルギーの存在に気付き、その線引きされている場所を直観してしまう。と同時にその二者が出合い、交じり合い新たな存在となつて価値を生み出しているのを透視してしまうところがある。そこには「風」が「草々の風」に質的に転換していく臨界線を見つめよう未津さんの感受性があるからだと思われる。

III章の「水の食卓」は四篇の詩から成っているが、三篇目の「帯の川」を読むと、母の締めていた帯の存在にこだわり、一本の帯を締めることによつて母は、真の母となっていることへの憧れを込めて記している。人は胸を締め付けるものを持つことになって、自分とはちがった他者に変身することによつて大いなる存在に向かうことを暗示しているように思われる。

5

新詩集『ブラキストン線——十四歳の夏』は、未津さんにとつて一九四五年の終戦の夏がどのような意味を持っているかを書き記した詩篇だ。しかしそれにとどまらずに戦前と戦後を分ける意味とは何かを問い、戦死者を追憶し、その当時を生きた人びとの暑い夏を永遠に刻印しようとした力作の詩篇群だ。特筆すべきことは全篇にわたる文体には、ざわざわとした縄文の風が通奏低音のように流れていることだ。I章の冒頭の詩「草々の風」の出だしのところを引用してみる。

草々の風

小さな背丈をふるわせている

草々に座り

密集する草々の命にすべてをあずけ

渡ってゆく風の行方を追っている

風を見たものはいたのか

風の象かたちを捉えたものはいたのか

一瞬だって風は止んだことはなく

飾り気なく吹いているだけ

(略)

草々に座り

風の由来に揺れている

タンポポの綿毛が無数に翔んで

悠然と

おおらかに

風の波長に乗り

この世からあの世へ渡ってゆくかのよう

やさしく運んでいる

草々をなびかせ

草々を泳がせ

浄土とはこんなところかと

土の湿りと草の匂いに抱かれ
死もまた祭りなのかと
祝祭の只中にいる

あの世渡りをした人々がやってきて

草々の人となっている

不思議なタンポポ野

風は往ったきり戻ってこないのに

風が呼んでくれたのか

哀しみは風を呼び

風は哀しみを呼び

透明に人の心を通して

風葬する(略)

この詩篇に流れている「草々の風」のリズムは、深い鎮魂の思いを秘めているのだろう。未津さんにとってこの思いが戦場に行った伯父たちやアジア太平洋戦争で死んだ多くの死者たちであることは間違いないが、それ以外の例えば青森の連隊から冬の八甲田山に向かい死んだ兵士たち、またこの地で亡くなった無数の縄文人たちへの鎮魂が秘められているのだろう。「哀しみは風を呼び／風は哀しみを呼び／透明に人の心を通して／風葬する」という詩行は、数千年・一万年の哀しみを呼び寄せているように感じられる。

詩集タイトルの「ブラキストン線」とは、未津さんの註に

よると津軽海峡で本州と北海道を東西に分ける動植物境界線

で、それを実証的に明らかにしたイギリスの動物学者トーマス・ブラキストンを記したものだ。未津さんはこの換喩によ

ってその土地に育まれる文化の固有性もまた地球規模の世界の中で理解されなければと考えているのだ。換喩とは隣接す

る存在によって言いたい対象を浮き彫りにする手法だ。この

「ブラキストン線」には後に述べる未津さんのライフワークとも

言える課題が込められているのかも知れない。それは未津

さんにとっての十四歳の少女時代の価値観が一変した戦争体

験であり、多くの戦死者や生き残った者たちの苦悩を決して

忘れてはならないのであり、風土の中で永遠に鎮魂が反復さ

れなければならぬという思いだと感じられた。最後に「苦い

八月」を引用してこの小論を終えたいが、多くの日本人を含

めて未津さんの十四歳の八月は決して終ることはない永遠の

「苦い八月」なのだ。

背囊の骨々が鳴り

はじまる兵士たちの帰還

日本列島の

あらゆる地場へ

兵士たちが整列する

あたかも生還者のように

母の懐へ

妻や子の許へ

恋していた女の側へ

待っている同胞の傍らへ

一斉にはじまる兵士たちの無言の帰還

暑い八月

旧暦二十四節気ではすでに立秋

虫たちも限りある命の果てまで鳴き

兵士たちの言葉が林立する

暑い八月

兵士たちは横たわること知らない

戦が終わって六十四年

未だ立ったまま眠っている

そつと手を添えておやり

野の草花を供え故国の土に安置せよ

飢餓という地獄の底を見た眼

捕虜の辱めを受けぬため僚兵に射殺された病兵の哀しい眼

名誉の戦死以前の死を

敵でなく祖国に殺戮された無念が立ちのぼる

ることを風のように語りかけてくれる。

やがて打ち殺した僚兵も死に
殺し殺された者同士が

肩を抱きあい

八月の峰を渡つてくる

日本列島のすべての故郷が

一糸乱れぬ帰還兵であふれる

ふたたびの

ふたたびの

やってくる年毎の八月

太く刻印せよ

明らかに記憶せよ

挙手をする兵士たちの

起立する背筋が

ふたたび旅立つのを

苦い八月の尾根を越えてゆくのを

この詩は新詩集の中でも最も鎮魂の思いが込められた詩だ。
未津さんの伯父や父の世代の兵士たちが旅立つて行った八月
は、日本人が決して忘れてはならない痛切な八月であり続け